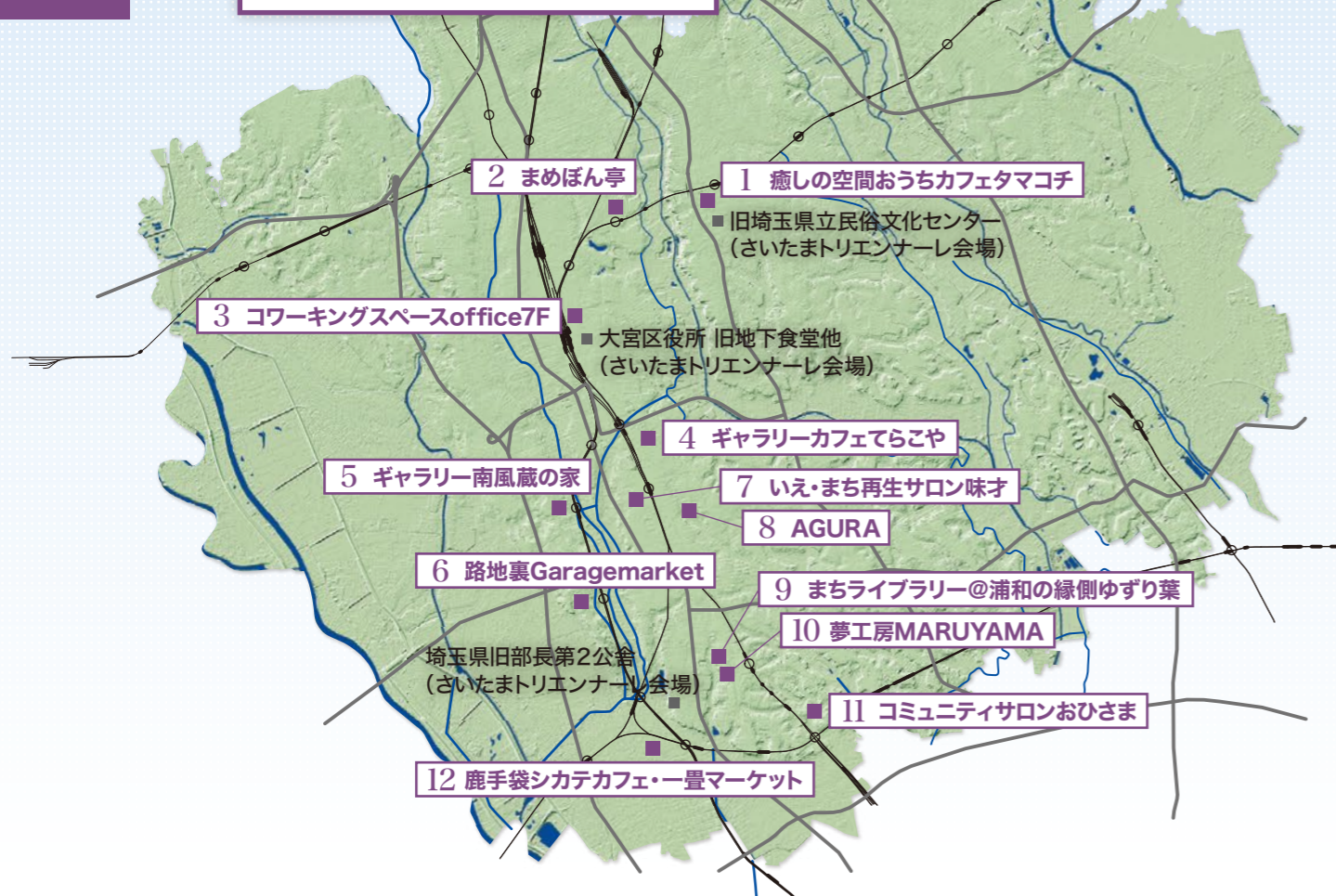




# リノベーション×まちに向けて開く(社会貢献) = 大切な場所



## 1 × まちの灯台のようなたまり場。 = 癒しの空間うちカフェマコチ

フィンランド語で「本の家」。女性が岩槻の街中で癒しの空間づくりに取り組み、常連達がつくるNPO法人が経営を引き継いだ。室内では講習会、朗読会、そして介護をする人たちのおしゃべりの会などが開催され、他のお客も一緒に楽しんでいる。壁には地域の文化イベント情報が貼り付けてある。土曜の朝に野菜の朝市も加えた。ここを拠点にして、新しいまちづくりの動きが発信されている。



## 2 × 地元商品開発と地域交流。 = まめぼん亭

「地域に役に立つお店」という家主に意気投合してNさんはアンテナショップ兼事務所を2014年に開設。県内中小企業20社以上の商品を陳列販売し、最近では羽生の老舗藍染を扱っている。店先では見沼田んぼの新鮮野菜を土曜日に並べる。2017年の世界盆栽大会に向けて地元のお店と一緒にタッグを組んでいる。小さなお店からの多彩な情報発信。



## 3 × ここから発信できる場をつくる。 = コワーキングスペースoffice7F

大宮駅東口徒歩2分のちょっと古い事務所ビルの7階。事業を立ち上げる人たちの孤独な状態を考慮して、Hさんはこの場所を開設。便利な場所で仕事を、打ち合わせをするという以上に、会うことを大事にしている。100名以上の会員がいるが、毎日40名以上が来場する。6階に貸会議室とシェアオフィス今年拡張した。講習会・交流会も頻りに開かれ、密度の濃い場になっている。



## 4 × 元気を養う場づくり。 = ギャラリーカフェらこや

亡父の思い出の和風住宅を3人の女性と男性がいるような活用法を編み出した。庭は子供たちが楽しく遊べるようみんなで作った。母屋和室では乳幼児と一緒に母さんたちがゆっくりと食事中。シェアオフィスもある。道路際に週替わりシェフのレストランを増築。シェフたちの中にはここで経験を積み独立する人も。最近、みんなでわいわいと食べるらこや食堂を始めた。オーナーのOさんの念願が3年目でかなった。



## 5 × 伝統を活かしながら、挑戦したい。 = ギャラリー南風(みなかぜ)蔵の家

旧と野宿に建っていた蔵造りの部材を取り込んだカフェ。1階は広々とした3つの部屋に分かれている。藤山一郎がと野に縁があったというエピソードから地域の文化の発掘活動もしている。ステージのある部屋では時折、歌声も聞こえる。Yさんは沖縄出身。ここから沖縄の姿が見えてくる演奏会や映画の上映などを企画する。近所の人たちも遠くからの人も、一緒に話し合う心地よさ。地域と世界が融合する拠点。



## 6 × お店とお客の相互交流。 = 路地裏Garagemarket

2014年11月から毎日曜日に実施。2016年8月第1日曜日は50回目、エスニックをテーマにペリダグスも登場した。旧材木店の倉庫には毎回10から15のお店が並び、これまでに150以上が出店。主催者はフリーマーケットから個店へのステップアップの場と位置付ける。運営する3人の若者は様々な工夫を凝らす。確実に広がっていく手こたえは病みつきになるという。



まちを散歩していると、10戸に1戸ぐらいの割合で庭木が生茂り雑草伸び放題の庭、雨戸が閉まったままの住宅を見つける。それでも、さいたま市は政令市の中では空き家率9.9%と最小の率だという。

空き家問題は人口が集中している区域でも過疎地でも発生している全国的現象。かつては財産としての期待していたものが、今では将来の負債になってしまう不安。現在の成長(フロー)を重視する社会経済のあり方から成熟(ストック)重視へと大きな転換をしていく時代のきしみと捉えるのだろうか。おそらく特効薬はない。様々な個人や地域での試行錯誤の取り組みが大きな構造転換につながると予測する。まず空き家にしない取り組み、遊休施設を違う目的で使いこなすといった試みが大事だ。こうした未来への挑戦がさいたま市内でも確実に増えている。それらを今回「リノベーション」×〈社会への働きかけ〉=「大切な場所」と題して、集めてみたい。ここでの「リノベーション」は、遊休化している建物に新しい価値を見つけ出すこと。建物を物理的に改修工事する場合もあるが、使い方を考えるだけのこともある。そして、その新しい価値とは社会に向けて発信していることを指したい。シングルマザーや子育て中の若い母親が気楽に集まれる場所を提供したい、地域に住む高齢者の居場所をつくりたい、つまらないと思っている普段のまちとは違うまちをつくってみたいなど実に多種多様だ。

事例から拾ってみたいいくつかのキーワードから通底する価値を見つけてみる。取り上げたすべての場所は強弱の違いはあっても未来志向のキーワードは共通する。

### 「いろいろな主体や思いを結ぶ」

そこに来た人のニーズを捉えながら、同じような目的をもった人を結び付けているコーディネーター役がいたり、出会いを促す勉強会・交流会を行っている。決して無理強いはしないが、ちょっと乗ってみると意外に面白い。

### 「一緒に学ぶ」

多くの個所で市民たちが一緒に学ぶこじんまりした集まりを開催している。まちの公民館と言ってもよいだろう。時間を気にしないで、自分たちの集まりという意識をもちながら、楽しい一時を共有する。疑問をつぶやくと、誰かが応えてくれる。

### 「広く発信しながら、受信は丁寧に、確実に対応」

小さな場所であっても、広く発信することは大事だ。お客は意外に遠いところから来て、近くの人たちは始めのうちは近寄らない。瞬時に消費されてしまう情報のなかから選んだことをじっくりと味わってもらおう。そんな情報の扱い方にそれぞれの場は工夫がある。

### 「気持ちよさを商う」

手作りの品物、自分の気に入った作家の作品などを販売する。商いは日ごろの鍛錬が必要な真剣勝負。品物をしっ

## 7 × 地域のたまり場をつくりたい。 = いえ・まち再生サロン味才

北浦和駅西口徒歩2分のビル2階にオープンした。工務店を長らく経営してきたKさんが温めてきた「いえ・まち再生プロジェクト」の一環、高齢者の安全・安心をテーマに、居場所づくりを目指して、新たな組織を立ち上げた。浦和高校や埼玉大学に縁の深い北浦和で市民活動・文化活動を育むレンタルスペースとして地域密着の活動を試行錯誤していく。



## 8 × ほっと一息ついて、出かけよう。 = AGURA

浦和元町の閑静な住宅地の一角にある2戸長屋のうちの1戸。シングルマザーや高齢者がイグサの薫る畳の上で、ほっと一息つけるコミュニティスペースを目指す。2階にインキュベーションのスペースを設けたい。現在入居者募集中。クラウドファンディングも達成できたが、難しさもあった。隠れ家的な存在価値、どう磨いていこうか楽しみ。



## 9 × 肩に力を入れずにゆっくりとまちを開こう。 = まちライブラリー@浦和の縁側ゆずり葉

この建物にはゆったりとした時間が流れる。茶道を主宰していた亡母の思いから地域に開かれた活動をひとつひとつ繋げている。まず、家の中の片づけをみんなに呼びかけて行った。この場の名前もみんなで考えた、まちライブラリーも始めてみた。家の前を通る人がのぞいていたら、声をかけてみる。この場の継続はご家族の気持ちの整理がつくまでの間かもしれないが、それでもこの場の大切さを、関わった方々が共有できる。



## 10 × 裏門通りに温かく開く。 = 夢工房MARUYAMA

裏門通りはヒューマンスケールの空間が気持ち良い。築90年を超える町家に夢工房は最近オープンした。昭和の雰囲気はほっと一息。玉蔵院の大屋根が見える2階には涼しい風が吹き抜ける。ちゃぶ台が人気者。市民向けの様々な教室があり、1階奥の部屋はこじんまりとした隠れ家風。まちのよろず屋を目指す活動がこの通りを元気づける。隣の花屋さんも先日開店。



## 11 × 好奇心旺盛な高齢者の集まり。 = コミュニティサロンおひさま

この地域の市民活動の草分け期から「おひさま」はあった。ここへはメンバー達が開設費を出し合っ、4年前に引っ越し。大家さんのご理解でベランダの手すりを外して道路側に入り口を設けた。高齢者が地域に住み続けるために積極的な取り組みをしている。現在、スマホやタブレットを活用する地域での安否情報ネットも勉強中。ゆっくりとコーヒーを飲みながら、趣味を楽しんだり、楽しい会話に加わるのもよいだろう。



## 12 × 住みやすさは自分たちで作る。 = 鹿手袋シカテカフェ・畳マーケット

新興住宅地に立つ古びた鹿手袋会館(自治会館)でシカテカフェは毎月第二日曜日開催。毎回工夫を凝らしたスローな企画が展開し、参加者も多様。そして、年に一度、近くの流通系倉庫が大きな屋根の下を開放し、一畳マーケットを開催する。いろいろな小さな思いの詰まったお店が出店し、カフェや休憩所のある会館と倉庫を中心に周囲のお店もノボリを立てて参加。みんながまちの変身を楽しむ。



かりと管理していくと固定客が付きだす。ついつい怠りがちになるが、次の機会を得るためには必須だろう。

### 「楽しいから集まる」

子育て中の母親たちはゆっくりと食事をして、しゃべりたい。高齢者もたまり場がほしい、地域の人たちがちょっと立ち寄ってしゃべったり、遠くから来てほっと一息つける場所。畳、ちゃぶ台、大きなテーブルなど様々なアイテムがそれぞれの場を特徴づける。更に、「一緒に食べる」が加わると交流の密度は高まるが、運営面での難易度は高まる。それでも思いを持ち続けると手助けがあるのが面白い。

### 「触発する」

シェアオフィスなどの賃料で経営を安定させるとともに、新しいビジネスチャンスを伸ばしていこうとする試みも大事だ。コワーキングスペース7Fはスモールビジネスの孵化装置のようだ。ちょっと後押しする姿勢は頼りになる。

### 「強い個性と柔軟な対応で運営する」

それぞれの運営者からは強い個性を感じる。吸収する姿勢は持ちながらも、自分（達）のこだわりは大事にする、リスクを避けるのではなく、慎重に対応するという姿勢は共通している。

### 「お金は後からついてくる」

お金はなければならないなりに運営できるが、賛同者たちからお金を集める仕組みをつくるのも面白い。ICTを使ったクラウドファンディングの活用は注目されているが、そのメリット・デメリットを冷静に見ながら、目標達成に至る過程を成果後の活動にどう結びつけるかが勝負どころだ。国等の補助金・助成金等は一過性のものとして利用し、説明責任の能力を高めるための修練の機会と捉えてみる。お金への対応は法人格の有無など組織のあり方に直結するが、答えは簡単に見つけられない。

### 「アートのお眼鏡をかけてみる」

今年の3月に浦和宿で【美術と街歩き】(主催：美術と街巡り実行委員会)が開催された。アーティストたちが街中の様々な場所でオーナーたちや利用者たちと意見交換しながら、作品を紡ぎだしていた。街角に立つ古い建物たちが不思議な輝きを見せていた。いろいろな場所が大切な場所に変身したようだ。アートという生活次元とは違う眼鏡を持ち込んだイベントは浦和宿ではこの秋からトリエンナーレの期間中【浦和宿まちかど美術館】が開催される。来年3月には第2弾【美術と街巡り】が更に内容を充実して企画されている。

さいたまトリエンナーレのテーマは生活都市に未来を発見することだ。まちなかにある遊休化した建物などが主要な舞台になっている。鋭い感性をもつアーティストがそのテーマに取り組む。浦和区別所にある旧県部長公舎や岩槻区の旧民俗文化センター、大宮区にある市民会館旧地下食堂などでアーティストたちがどんな世界を展開するだろうか。今回のトリエンナーレには外から来るアーティストたちがさいたまに何を発見しているのか興味がある。

### 「大切な場所を見つける」

自分にとって大切な場所はほかの人と共有したいという思い。自分の枠を越えてみる試みが現代を覆っている閉塞感を打破していくのではと考える。現代の空き家はまさに関係性を絶たれた、閉塞する精神の象徴のように思えてならない。大袈裟な言い方かもしれないが、個を重視しすぎた社会制度そのものの弱点が表れている。しかし、さいたま市内の各所で見た大切な場所は果敢に挑戦している事例だと思う。そして、次々と新陳代謝を経ながらも新たな試みが出てきている。さいたまがますます面白くなることを実感している。【文責：若林祥文】

# Report

つくたまプロジェクトレポート

## 丹過・長谷川見世蔵の保全活用の取り組み

2015年の始めの頃、岩槻区の会員から岩槻駅直近の蔵造りを保存・活用することはできないだろうかとの相談を受けた。そして、年度後半のさいたまマッチングファンド事業に応募し、採択された。現在、2016年度も採択されて事業を地域団体、市民そして区役所とともに取り組んでいる。

### 丹過・長谷川見世蔵を通じて地域の歴史を再発見する。

岩槻城下町を取り囲んでいた御土居の出入口のひとつである丹過口に通ずる丹過通りに長谷川見世蔵は面している。建築は明治10年ごろ、白木綿問屋をしていたお店と裏に連続している住宅部分が端正な姿を見せている。昭和56年ごろからご当主と地元の大工さんたちと相談しながら丁寧な改修工事を行った。屋根を軽くし、傷んでいた袖蔵を最終的には撤去し、住宅部分の間取りの変更などをした。東日本大震災時にもほとんど被害を受けなかった。今年8月に、国登録有形文化財になった。白木綿問屋の歴史は、木綿のまちとして栄えたことを物語っている。

### 市民活動を助成するマッチングファンド事業で、支える体制を構築する。

この長谷川蔵は、長年にわたりご当主一家が丁寧に維持管理してきた。しかし、高齢になり、今後もこの建物がどう活用できるのかと悩まれていたことを受けて、どんな取り組みがふさわしいか、自治会、市民団体、区役所の方々に集まっていただき検討した。

### 「蔵開き」でふさわしい事業を試行錯誤した。

平成25年度の事業は、長谷川蔵にふさわしい市民活動という問題意識で、お試しでやってみようとした。9月末にプレ「蔵開き」を行った。懐かしい街の写真を展示をした。その後、「蔵開き」を鷹狩行列などの地域のイベントに合わせて、不定期に開催した。隣近所の方々が多く来場し、お店を覗いていた観光客に声をかけて見ていただいた。蔵開きでは、子供たちが制作した鐘馗様の屋根飾りを展示したり、地域の藁細工名人による正月飾りの教室を開催した。そうしたイベントの時にもボランティアの方々が用意周到な準備作業をしていただいた。また、御土居跡の半分を歩く街歩き講座を開催して、城下町の歴史的遺構を現在の街の中に探してみた。

2016年度は、昨年度に引き続き蔵開きとして市民向けの論語教室やお琴の演奏会を行った。お琴の演奏ではお店の音響環境が大変良いことがわかった。

7月29日、登録有形文化財になったことを記念して講演会を地域のNPO法人伝統文化推進機構、NPO法人岩槻市民まちづくり協議会と共催で開催した。



蔵開き当日の長谷川見世蔵



蔵開きには懐かしい写真などを掲示しています

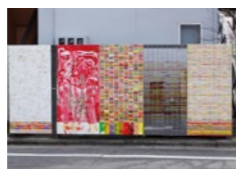
### 今後の課題

- 1 建物を大切に使うルールを定め、建物を通じて地域の歴史を再発見する。  
市民の活動を支えるためには、訪問者を迎え、管理するための整備と繊細な日本家屋を使う作法を定める必要がある。忘れていた身近な歴史を丁寧に探り、積み上げていく作業をしていく。
- 2 市民がふさわしい文化活動を楽しむ。  
繊細な日本家屋にふさわしい市民活動を今後も試行錯誤しながら増やしていくことがより一層の価値を高める。そうした活動を担う組織の立ち上げも必要になる。

- 3 良い立地条件を活かす。  
駅から至近距離であり、城跡や今後整備される仮称人形会館への主要導線にある。郷土資料館、遷喬館、大正館などの文化財を巡るコースにあり、岩槻の街歩きの観光拠点としての重要な位置にある。  
これらを実現していくためには、所有者の思いを丁寧に受け止めて、無理をしないで可能性を探る柔軟な姿勢が必要だと思う。

特別篇 × 街に出てきたアートたち、見方を変えてみると面白い。  
＝ 美術と街巡り・浦和宿

アーティストたちが浦和の街で展開した「美術と街巡り」が2016年3月に行われた。旧中山道沿いにある古いお店や新しいお店の店先や室内で、アーティストとオーナーが様々な交流をして、大切な場所づくりをした。うらわ美術館でも作品展示はあったが、街に出たアートはいろいろな表情をしていた。お店にすっかり溶け込んでしまった作品もあれば古い建物の記憶を引き出すものがあった。今秋と来春に2つのアート展が浦和宿を範囲として開催される。



特別篇 × 未来を拓く知恵を発見しよう。  
＝ さいたまトリエンナーレ・旧民俗文化センター

岩槻区加倉地区にある別名、わざの博物館であった旧県立民俗文化センターは2006年に閉館。ぐるりとゆったりした回廊が回る中庭。その列柱と草の生い茂った中庭が祝祭の空間に生まれ変わる楽しみ。かつての陳列室ではアーティストたちの夢が繰り広げられる。作品たちから発せられる極彩色のメッセージをうまくキャッチできるだろうか。岩槻ではほかにも和風民家でパフォーマンスや昨年開催されたホームベースプロジェクトもやる。歴史を誇る街での未来の発見イベント。





# つくたま 6

**千葉 晃一さん**  
【ゆずり葉の運営者／一般社団法人コレカラ・サポート 代表理事】

【プロフィール】相続や財産管理等、高齢期のご家族が抱える複雑多岐な悩みをワンストップで対応する社団法人を2011年から運営。NHKが高齢化社会の問題を特集する企画“プロジェクト2030”において紹介される。CFP®、1級ファイナンシャルプランニング技能士

## 空き家になるのを未然に防ぐ事業、空き家を活用する事業に一般社団法人コレカラ・サポートは取り組んでいます。

当法人は高齢者がいる家族を支える相談業務を行っている税理士、司法書士、ファイナンシャルプランナーなどの士業の団体で、訪問して相談をする活動が主です。最近では、ゆずり葉に来られて、相談をする方が増えてきました。

ゆずり葉開設の経緯は、役員の方の母親が亡くなり、地域のために役立ててほしいという遺志を尊重したいと相談された時期と、千葉さんがご家族を亡くされた方や介護・看護をしているご家族の方のための場所を作りたいという気持ちが丁度一致した時です。長年茶道をしてきた家は本格的な日本家屋であり、家の中を整理することから始まりました。

さいたま市市民活動サポートセンターの集まりなどで意見交換していくうちに、運営イメージが固まってきました。法人では、空き家活用事業【enプロジェクト】として、3つの“えん”「縁」、「円」、「entry（エントリー）」というコンセプトを掲げました。ゆずり葉の場合は法人が借家契約をして、

有志が設立した任意の集まりが運営する形式で進めています。この思い出の建物の活用は故人の意思があったのでそれを尊重します。当面は2年間の契約をし、延長もあり得るが、持ち主が生活設計をしていくなかで、この家を巡る整理ができればよいと考えています。

## 緩いルールに関わる方々と一緒に作り上げていく。

初めから完全な形を綿密に考えて整えるよりも、ちょっと前向きな今やれることをやってみようという軽さから出発し、現在も続いています。

また、家中を整理する段階から多くの方に関わってもらいたいと思い、本や家財道具類の整理も呼びかけました。蔵書の整理などかなり時間がかかりましたが、本好きな方々とおしゃべりしながら、次の展開である、まちライブラリーの開設にもつ



ながりました。

「ゆずり葉」の名称は、みんなで集まり、庭の草木を見ながら考えました。八千草薫の同名の映画があったらいい。また、デザイナーのSさんがロゴや看板を考えてくれました。参加した人たちの思いや

力を引き出していけることが場づくりにとって大事なことです。

## 開かれたコミュニティスペースをつくりたい。

地理的な意味で同心円的に人が集まってくれることが望ましいが、ネットワーク的な集まりも大事です。近所の人たちや通りがかりの人が入りやすいように門を開けたり、看板を置いたり、玄関戸からもぞき込むこともできます。飛び込みの来訪者も多く、時間の許す限り対応します。

## 公設や他の民間設置の施設との違いとは。毅然と対応します。

関わる人たちがやれることをやる、「お客さん」にしないでそれぞれが主体的にかかわる姿勢を大事にして進めてきました。また、「会員」という権利意識を振りかざさないでほしいと思っています。この趣旨に合いそうもない人にはご遠慮いただくこともあり、この場所を大切にしている趣旨をご理解いただきたいと思います。

これまで赤字にならない程度の収入はあり、今後もこうした取り組みを別の場所でも機会があれば取り組んでみたい。

【レポート：若林祥文】



「ゆずり葉」の名称は、みんなで集まり、庭の草木を見ながら考えました。八千草薫の同名の映画があったらいい。また、デザイナーのSさんがロゴや看板を考えてくれました。参加した人たちの思いや

## まちづくりNPO紹介 6



## 桜区のまちづくりを進める会

【設立】平成19年3月  
【法人形態】任意団体  
【代表】尾田 四郎さん  
【会員数】23名、30名(準会員、賛助会員を含む)  
【電話】048-863-0748(尾田)  
【E-mail】oshiro212@yahoo.co.jp(尾田)

## 会の設立と活動の趣旨

桜区の区民会議第1～2期生のOG・OBを中心に組織し、区民会議での提案の実現を含め、桜区の住み良い、魅力あるまちづくり推進のために必要な活動や提言、地域のまちづくり団体の活動への協力等、継続的なまちづくり活動をねらいとしています。主なテーマは…

- ①荒川堤外地「ハンノキの里」の保全と、「里山公園」づくり  
自然観察会、自然環境調査を大学の先生等の専門家とともに、植生調査等の実施を行う。また、それをもとにした、荒川堤外地での自然観察会、フィールドワーク、クリーンアップ活動等を

実施している。  
荒川堤外フィールドワーク活動では、夏に小学生+親を対象に、自然観察、地域の方々の竹細工づくり、地域のお米をつかった昼食等、夏の日を楽しく過ごします。

## ②地域防災活動

自治会連合会、小中学校等と連携するなかで、地域の防災について、避難場所運営委員会の設置と運営への協力・支援等を行っています。

## これまでの実績や主な成果

荒川堤外の鴨川旧河道沿いにピオトープをつくり、周辺を「ハンノキの里」として市民の憩いの場とするために、自然環境調査、定期的な自然観察会、子供たちも参加するフィールドワーク活動を行い、年2回のクリーンアップ活動では、荒川堤外地の有害外来植物の駆除、ごみひろい等の清掃活動を行っています。  
シンポジウムを年1回開催し、専門家を交え、荒川堤外地の「ハンノキの里」を「里山公園」として整備、周辺の大規模

公園を再整備し、スポーツや自然散策等、多様な希望を持つ多くの人々が利用できる、「(仮称)さいたまウエストパーク構想」を提案し、その実現に向けて取り組んでいます。

また、地域の小中学校、自治会連合会、埼玉大学等と連携しながら、防災や交通環境の改善等、地域のまちづくりへの取り組みに取り組んでいます。



定例の自然観察会で季節を楽しむ



堤外にある旧農家が活動拠点



尾田会長のご挨拶で定例の観察会が始まる

## 今後の課題や方針

桜区内で活動している他のまちづくり団体との連携に取り組み、地域の自治会連合会の活動や、西浦和駅東西地区まちづくり協議会の活動に参加、協力していきます。協議会は、西浦和駅周辺地区の整備について、まちづくり憲章を制定し、自治会や商店会、周辺の住民を加え、地域のまちづくりに取り組んでいきます。【文責：尾田 四郎】